



少女の延長期間有り!!  
2015.10.23 (金) ~ 2016. 2. 29 (月) 11:00~17:30

# 堀井正明回顧展

## 昇華する魂

~絵が生きる事のすべてだった~

鼎談

都築響一

& 宇野学・板垣崇志

にしぴりかの

美術予食官



休館日

木曜・年末年始  
(12/30~1/3)

2016年 1月23日(土) 13:30~16:30

参加費 無料 ただし要事前申込

入館無料

mail:info@nisipirica.com 070-5011-0028 (小野田) 〒981-3621宮城県黒川郡大和町吉岡字館下47

## 遺された作品～堀井正明

「絵が生きることのすべてだった。絵しかない。そういう人生だった」。堀井さんのご実家へ伺った際、ご家族が開口一番におっしゃった言葉です。作品保管のために建てられた倉庫一杯、さらには家の中にも膨大な量の作品群が遺されており、今なお堀井さんのエネルギーが、その営みを続けているかのように、これは是非、後世に残しておきたい、遺しておくべき作品だと確信し「にしぴりかの美術館」に全作品を収蔵するにいたしました。

## 見つけられた作品～昇華する魂

遺された膨大な作品群のすべてを整理していたところ、今まで把握していなかった作品がさらにあることがわかりました。それらの100号大の油彩作品は、木枠から外され、10数枚まとめてロール状になっていました。おそらく長期入院する直前の時期に描かれたと思われるこれら油彩画は、かなり精神的に調子を崩していた時期に描かれたのでは、と推察されます。本人はもちろん大変な窮境だったでしょうが、ご家族もどれほど大変だったことかと思えます。

## 絵が生きる事のすべてだった

しかし、その中であって、堀井さんは描かずにはいられなかった。ご家族の「絵がすべてだった」という言葉は、この困難な時期を経験したからこそ必須に出現した象徴的な言葉なのだと思います。堀井さんは単に「絵を描いて生きた」のではなく、苦難・苦境の中にあっても「絵を描くことを生きた」のだということは、これらの作品から、切実さをともなってヒシヒシと伝わってくるのです。

(平川病院、宇野学さんの言葉から抜粋)

### 都築 響一

1956年、東京生まれ。76年から86年までポパイ、ブルー・タス誌で現代美術、建築、デザイン、都市生活などの記事をおもに担当する。89年から92年にかけて、1980年代の世界の現代美術の動向を包括的に網羅した全102巻の現代美術全集『アート・ランダム』を刊行。以来現代美術、建築、写真、デザインなどの分野での執筆活動、書籍編集を続けている。1993年、東京人のリアルな暮らしを捉えた『TOKYO STYLE』刊行。1996年発売の『ROADSIDE JAPAN』で第23回・木村伊兵衛賞受賞。現在も日本および世界のロードサイドを巡る取材を続行中である。出版、TV出演、講演等多数。

### 宇野 学

平川病院<造形教室>スタッフ。東京精神科病院協会「心のアート展」の中心スタッフとして、堀井さんの作品に深く関わる。

### 板垣 崇志

花巻市「るんびにい美術館」アートディレクター  
各地の美術イベントでは軽妙で的確な  
コーディネーターとしても定評がある。

問合せ：  
NPO 法人黒川こころの応援団  
**nisipirica**(にしぴりか)  
〒981-3621 宮城県  
黒川郡大和町吉岡字館下47  
070-5011-0028(小野田)  
info@nisipirica.com

